



平成30年の文字として「災」という漢字が選ばれたことからもわかるように、昨年は自然災害の多い年でした。それと同じく人々の心にも悪魔が入り込み、あまりにも残酷・理不尽と思える事件が頻発しました。又政治・経済の世界でも自分だけが、自社だけが、自国だけが得をすれば善いと邪見が大きくクローズアップされ、その邪見を支持する愚者の増加が社会不安を掻き立てました。

今年もこの邪見・墮落が横行し、厳しい社会になるだろうと予想されています。それでも今年には元号が変わる事もあり、新鮮な風を吹かして、心豊かな年にしたいものです。

中国に「亥微陽を起す」という故事があります。「亥の年はほのかな光が差し込む。」という意味で、亥年を迎えた今年には、この中国の故事を現実のものとするべく、温かい社会をつくる為に互いに出来る努力をしようではありませんか。

その為には如来様に出現して頂く事が最善だとは思いますが、如来様の出現を願う前に、如来様の御教えを学び、その御教えを守って一日一日を誠実に、慎ましく、思慮深く生活して行きたいと願っています。

御教えに沿った堅実な営みを続ければ、私たち皆が願うように仏様が出現され、至福の世界にお導き戴けると信じております。

私たちの精進で、微かでも温かい陽が差し込む一年にして行きましょう。

1月 行事予定	
元旦～5日	修正会 厄ばらい祈願祭
11日	稲荷社初縁日
17日	初観音ご縁日 ご縁箸のお年玉を授与します。
20日	権現祭 権現粥接待
2月 行事予定	
3日	節分会 星祭り
10日	心経講座
11日	稲荷社ご縁日
15日	涅槃会
17日	観音様ご縁日
28日	懺悔護摩供養

正月の言葉

如来は時代の墮落の際に出現する
あるいは人々が墮落した際に
あるいは悪徳が栄える際に
あるいは邪見が横行する際に

法華経方便品より



星祭り

2月3日 午後1時より

豆まきは1時と法要
終了後の2回です。
福豆を拾って福を招き
ましょう。



星祭り祈禱料
お一人800円



お釈迦様がおてくなりになった日。
煩惱の宿る肉体から離れ、完全なお覺
りに入られたことを涅槃と云います。
当清水寺ではお釈迦様の鼻くそをお供
えし、お釈迦様にあやかり、少しでも
お覺りに近づくためにお釈迦様の鼻く
そを頂戴しています。

二月十五日 涅槃会

お釈迦様の鼻くそ接待
参拝の方は自由に
頂戴して下さい。

仏教入門 No.51



先月から「戒律」(かいりつ)を取り上げています。その中で、元来この語は「戒」と「律」という二つの異なる言葉でしたが、共通する部分もあり、時代を経て並立して使われるようになったところまでを説明しました。

それでは、まず「戒」について見ていくことにします。在家信者が守るべき戒として有名な「五戒」(ごかい)から取り上げましょう。以下にその内容を列挙してみます。

- ①不殺生 (ふせっしょう)
- ②不偷盜 (ふちゅうとう)
- ③不邪淫 (ふじゃいん)
- ④不妄語 (ふもうご)
- ⑤不飲酒 (ふおんじゅ)

ちなみに、⑤不飲酒の「飲酒」は、通常「いんしゅ」と読みますが、仏教読みでは「おんじゅ」となります。

文字を見て、意味が理解できるのは①と⑤ぐらいでしょうか。②から④の語は、普段の生活ではあまり見かけることのないものだと思います。今月は、①不殺生について解説していきましょう。

①不殺生は、読んで字の如く、「生きものを殺さない」という意味です。仏教に限らず、仏教と「姉妹宗教」と呼ばれるジャイナ教や、仏教が成立する以前から存在したバラモン教の一部でも不殺生を重視していたと言われています。つまり、不殺生は仏教特有の教えというわけではありません。しかし、違う言い

方をすると、上記の宗教以外では殺生を否定しないグループが存在したということになります。経典でも言及されていますが、(意図的な)殺生について、たとえば、刃物で人を傷つけた場合でも、刃物が人間を構成する要素を通り抜けただけとの解釈から、問題ではないとの考え方があり、釈尊在世時には道徳を否定する人々がいました。そのような状況下であるため、現代の我々からすると当然のことですが、釈尊が遵守すべき項目として不殺生を挙げることに意味はあったのでしょうか。

では、なぜ人を殺してはならないのか、との疑問に対して、仏教では次のように考えます。

いかなる人にとって「自己よりもさらに愛しいものはどこにも存在」せず、「同様に他の人々にもそれぞれ自己は愛おしいゆえに自己を愛する者は他人を害してはならない」と説かれています。すなわち、自分は殺されたくない(害されたくない)と思うことは、他の人々も同じなのだから、そのような行為をしてはいけない、ということです。

さらに仏教では、人間だけでなく生きものすべてを殺さないことが理想とされますが、社会で生きていくとなると、そうもいかない場合がでてきます。経典でも在家信者の肉食は容認されていましたから、在家信者にとって、不殺生は厳格に遵守できる戒めではありませんでした。